



技術過信せず 考える力を

情報通信技術（ICT）を活用した防災教育が広がっている。アプリを使って防災マップを作ったり、AR（拡張現実）技術で地域の災害リスクを手取り、新たな手法に親がある半面、専門家は「技術過信せず、災害に備える想像力を高くつけないといけない」と指摘する。

■防災マップ作り
七月上旬、名古屋市立東郷中学校（千種区）の生徒や図書委員会の三人が六班に分かれ、タブレット端末を手に学校周辺を探索した。公園や真山、図書館の周りを巡り、災害時に危険なところと写真を撮り、コメントを端末上書き込む。

生徒たちが取り組んでいるのは、ICTを使った防災マップ作りだ。信州大の広岡大助教授（地理学）と名古屋市内のNPO法人が開発した地域学習用のアプリ「フィールドオン」を活用。写真やコメントを入力する。そのデータが地図に取り込まれる。「地震がある自動警報機が倒れるのも、急な斜面などで土砂崩れが起きる。生徒たちは授業を次々と言いつつ、防災マップは九月に完成させて生徒に配り、学校近くの中津川スポーツセンターに出張する予定だ。二年の齋藤あきま（16）は「私たちの周りにも災害の危険が隠れていることが分かった。家族と話して、情報を発信したい」と話した。

この防災マップ作りは田野や熊本をの小学校でも実施している。広岡教授は「段階の登下校では気づかない点に気づき、災害の様子を自分たちで考えきつかけなると効果を期待する」。

ICTを使った防災教育が広がる背景について、名古屋



タブレット端末を手に学校周辺を歩き、防災マップ作りに取り組む生徒（名古屋市千種区）。

タブレット配布や必修化進む

大の倉田稲（特任准教授）「災害情報は、国のGIGAスクール構想によつて、ほぼすべての公立小中学校で使われる。コロナ禍でオンライン授業が進み、ICTのハードルが下がったと指摘する。もう一つの背景は、本年度に高校の学習指導要領で地理の必修化が予定されていることだ。『地理総合』では地域の災害リスクを調べる学習が盛り込まれる。『基礎・基本』でも、AIやビッグデータを活用して、AIを使った防災マップの活用が期待されている。『基礎』でも、AIやビッグデータを活用して、AIを使った防災マップの活用が期待されている。」

「授業中にタブレットの活用を進めよう」という動きが、名古屋市千種区にあるこの学校の進め方も同様だ。市内で災害時に活用可能なタブレットの配布が急務とされている。授業現場では、教師の指導を補助する役割も果たす。洪水や津波時に想定される浸水の深さが、画面で実際の景色に合成表示され、避難場所までの距離や方向も表示される。ある一人は「明後日の午

災害時にタブレットの活用を進めようとする動きが、名古屋市千種区にあるこの学校の進め方も同様だ。



安政東海地震で石碑が倒れるなどの記録が残る宝珠寺。碧南市音羽町で。

陣屋の日記に被害の記録

愛知県碧南市には江戸時代、水野家が西三河の領地を支配するたために築いた大浜陣屋がある。大浜陣屋日記は、当時の住職が陣屋日記の中で、安政東海地震（一八五四年）の被害状況を詳細に記述している。陣屋があった同市羽野の大浜陣屋広場、名古屋大浜陣屋センターの都築充雄特任准教授（建築学）が教えてくれた。

安政東海地震は各地で計二千人以上の死者を出したとされる。市文化財課の田代謙二（たしろけんじ）は「陣屋日記には、陣屋に被害を受けた寺院や村々による被害を受けたことを報告した」と説明。泥砂が吹き出し、日記が腐敗したため、日記には発生時の状況などの情報が残っていないとされている。

「『日記の人は驚いているが、被害の被害、津波の発生が記録されていない』と驚かされています。『日記の人は驚いているが、被害の被害、津波の発生が記録されていない』と驚かされています。『日記の人は驚いているが、被害の被害、津波の発生が記録されていない』と驚かされています。」

中部地域づくり協会
一般社団法人（中部地域）
「協会（名古屋）は、カラッと過去の災害写真や、任太堂の「あつ森」の森を使った防災啓発動画を、インターネットサイトにアップロードして、誰もがみられる災害の記録（http://www.ccb-txtroom.jp/）で公開している。サイトでは、昭和時代の街をイメージした仮想空間に、

- アクセス
大浜陣屋広場 愛知県碧南市羽根町1の12。名鉄三河線碧南駅から徒歩約10分。
宝珠寺 碧南市音羽町1の48。碧南駅から徒歩約5分。
西方寺 碧南市浜寺町2の19。碧南駅から徒歩約5分。



CBCテレビによる動画はこちら

「あつ森」動画で避難指南
濃尾地震（一八九一年）や伊勢湾台風（一九五九年）など、中部地方で起きた災害の写真を活用。当時の白黒写真をカラー化した写真を背景として、被害の概要や近年の類似災害を紹介している。動画は「あつ森」の一本「あつ森」で大切な命を守るには、避難情報の仕組みや注意事項を解説。水害の早期避難を促す「あつ森」が2020年7月に、タブレット端末未使用の学校の防災学習にも活用されている。協会の大鍋一博さんは「若い世代が災害を自分ごととして考えるきっかけになれば」と話している。

今回の「備える」は9月1日に掲載する予定です。